

体外成熟培養(IVM)を用いた妊孕性温存療法(FP)の造血器疾患患者に対する有効性

井谷裕紀^{1,2}、水野里志¹、藤岡聡子¹、福田愛作¹、森本義晴³

¹IVF 大阪クリニック、²広島大学大学院統合生命科学研究科、³HORAC グランフロント
大阪クリニック

【目的】

がんの化学療法による妊孕性低下の懸念から化学療法前のFPが推奨されるが、造血器疾患は治療の特性上、化学療法が既に先行している場合がある。IVMによるFPは卵巣組織凍結に懸念される腫瘍細胞混入を回避し、短期間で実施できる。そのため日本癌治療学会のガイドラインでも造血器疾患患者に対するFPの選択肢として記されている。しかし、未だ報告が少なく推奨段階ではないとされている。そこで本研究では従来のFPとIVMを用いた方法の成績を比較し、造血器疾患患者に対するIVMの有効性を検討した。

【方法】

2006年1月～2025年7月にFPを実施した造血器疾患患者24周期を対象とし、調節卵巣刺激で卵子凍結を実施した群(体内成熟卵群)とIVMによる卵子凍結を実施した群(IVM卵群)における当院初診から採卵迄の期間、採卵迄に化学療法先行があった症例の割合(先行率)、採卵数、成熟率、変性率、凍結数を其々比較した。

【結果】

体内成熟卵群と比較し、IVM卵群では初診から採卵迄の期間は有意に短く(18.2±25.79日 vs. 1.8±0.40日, p<0.05)、先行率は有意に低かった(78.6% vs. 16.8%, p<0.05)。更に、IVM卵群では卵成熟率(94.9% vs. 30.6%, p<0.01)は有意に低く、凍結卵数(8.1±7.21個 vs. 3.2±2.13個, p<0.01)は有意に少なかった。他の項目に有意差はなかった。

【考察】

既報と同様、本研究においてもIVM卵群の成熟率は低く、それに伴い凍結数が少なくなった。一方でIVM卵群は短期間で採卵可能であり、多くの症例で化学療法前にFPが出来た。特定の薬剤が受精能や胚発生に影響を与えることが報告されているため、薬剤暴露が懸念される緊急症例においてIVMによるFPは有効であると示唆された。また、IVMによる卵成熟率の更なる向上が課題である。